長野県総合計画審議会議事録

１　日　時　　平成24年４月23日（月）午後１時30分～午後３時30分
２　場　所　　長野県庁３階　特別会議室
３　出席者
委　　員　　青山委員　小口委員　金委員　小松委員　中嶌委員　中山委員
野原委員　樋口委員　藤原委員　増田委員　松岡委員　母袋委員
諸富委員　山沢委員
専門委員　　上原専門委員　扇田専門委員　小澤専門委員　武者専門委員
長 野 県　　阿部知事　原山企画部長　岩嶋企画参事兼企画課長
小山政策評価課長　中坪企画幹ほか

４　議事録

（進行　中坪企画幹）
それでは、皆様、定刻になりました。ただいまから長野県総合計画審議会を開会いたします。私は、本日の進行を担当いたします事務局の中坪と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
それでは最初に、委員の皆様方の本日の出席状況についてご報告いたします。ただいま14名の委員の皆様にご出席をいただいております。本審議会条例第６条の規定によりまして、会議が成立していることを報告申し上げます。また本日は、専門委員４名の皆様にもご出席をいただいております。
なお、内山委員、中澤専門委員が、所用のため欠席でございます。
それでは、次第の２でございます。開会に当たりまして、長野県知事阿部守一からあいさつを申し上げます。

（阿部知事）
皆様、こんにちは。総合計画審議会、開催に当たりまして一言ごあいさつを申し上げたいと思います。
まず、平素から委員の皆様、そして専門委員の皆様方には、この新しい総合計画の取りまとめ、さまざまなお知恵をいただきつつ、ご尽力を賜っておりますこと、この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。本日もお忙しい中、ご参画をいただきましてありがとうございます。
昨年の１月に、総合計画審議会にこの５か年計画の策定を諮問をさせていただきました。これまで５回にわたって審議会でご議論をいただいているところでありますが、今日は大綱素案という形で皆様方にご議論をいただくわけであります。
私としては、いろいろなところで申し上げてきておりますけれども、まさに時代は大きな転換点でありますし、これまでのいろいろな制度、仕組みは本当に大きな成果をこの日本全体で上げてきたと思っています。社会保障のあり方にしても、あるいはエネルギーの問題にしても、これまで機能してきた、そのおかげで日本社会が繁栄を築いてきたという

ふうに思っております。ただ将来に向けて、これまでと同じような制度、発想でいいかと問われれば、私は相当、いろいろな意味で大きな転換を図っていかなければならないというふうに思っております。

そうした中で、長野県、私は非常にさまざまな観点で強みを持っていると思います。そうした強み、例えば人と人との絆でありますとか、あるいは豊かな自然環境でありますとか、そうした長野県の強み、あるいは健康長寿であったり、教育であったり、そうしたシステムをしっかりと築いてきた長野県の強みというのは、これからの新しい社会に向けて、実は大きな土台になるものだというふうに思います。20世紀型の価値観からすると、都会に比べて長野県はいろいろな意味でまだまだ遅れているのではないかというふうに評される場面も現実にございますけれども、実は20世紀型、あるいは、より未来志向で世の中を考えたときには、実は都会にはない強み、すばらしさというものを数多く有しているのが私たちの長野県だというふうに思っております。ぜひ、そうした強みをどんどん生かしながら、県民の皆様方が安心して、そして豊かな気持ちを抱きながら、希望を持って暮らすことができる長野県をぜひつくっていきたいというふうに思っております。

この新しい総合計画は、そうした意味で、これからの長野県をどう導いていくのか、どういう方向を目指していくのかということで大変大きな意味を持つ計画でございますので、どうか委員の皆様方には、引き続きお知恵をどんどんお貸しいただきたいと思いますし、ぜひ率直で忌憚のないご意見をどんどん出していただいて、よりよいものに磨きをかけていただきますように、心からお願いを申し上げて、私の冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

（中坪企画幹）

それでは、会議事項に入ります前に、４月１日付で職員の人事異動がありましたので、県側の出席者を紹介させていただきます。

まず企画部長の原山隆一です。

企画参事兼企画課長の岩嶋敏男です。

政策評価課長の小山聡です。

以下、関係する職員が本日出席させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次に資料の確認をお願いいたします。本日の会議資料につきましては、事前に送付申し上げてございます。お手元の配付資料一覧にございますとおり、本日は資料として１から３まで、参考資料として１から４までございます。

資料に不足等ございましたら、係の者が伺いますのでお知らせ願います。資料につきましては、よろしいでしょうか。ありがとうございました。

（中坪企画幹）

それでは、これより議事に入りたいと思います。当審議会の議長は会長が務めることになっておりますので、山沢会長に進行をお願いしたいと思います。山沢会長、どうぞよろしくお願いいたします。

（山沢会長）
　委員の皆様、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。桜も一気に咲いて大変いい日なんですけれども、雨なところはちょっと残念でございます。
　この総合５か年計画も、専門委員の皆さんのご努力によって、７回ほど専門委員会議をを開いていただきまして、この後、ご報告がございますけれども、審議が大分詰まってまいりました。また、それと同時に、地域懇談会に委員の皆様、積極的にご参加をいただきまして、ありがとうございます。これからご検討いただきますこの大綱素案の中にも、皆様が出ていただきました地域懇談会の意見等も入れてございます。そういうことで議論を、本日は深めたいというふうに思っているところでございます。新たな総合５か年計画の策定という本日の議題ということになります。
　それでは、専門委員会議での検討状況につきまして、上原専門委員からご説明をいただくことになります。それでは、よろしくお願いします。

（上原専門委員）
　それでは、お願いいたします。前回以来、専門委員会議を重ねてまいりまして検討を加えてきました。ここでの審議会でのご意見、議論、それから県民の皆様からの意見などを踏まえながら検討してまいりました。またこの間、年度末、年度始めでもありますから、さまざまな経済的な、社会的な、いうなら指標とも言えるものも見えてきておりますので、そんなものも意識しながら検討を加えてまいりました。
　その検討の過程において、重点を置いた意見、そういったこと等を、僕のほうは、資料１を中心に報告させていただきます。後々にまた具体的なご説明あるかと思いますので、簡潔に説明をさせていただきます。また、たくさん議論いただきたいと思いますので、ちょっと早口で説明させていただきますが、お許しください。
　さて、資料１ですけれども、こんな順でまいります。第１編の「時代の潮流と課題」から、左から右へ、第２編の上から下、それから左から右へという、そういう流れで説明をさせていただきます。
　最初ですが、第１編の現状認識のところで、「時代の潮流と課題」という部分についてです。ここでいただきましたご意見は、日本経済の流れというものを長期的にとらえたらどうかと、そういったご意見をいただきました。それにつきましては２番目のところを重点に、「成熟した経済」というそういう言い方のもとで、ここに記されているような方向で考えさせていただきました。
　それから、３番目のところへ移りますが、人々の「価値観の変化」、これは東日本大震災、こういうものはあったんですけれども、それ大事なことなんですが、それだけではなくて、今の社会、現代社会の底流にある人々の考え方、これも押さえておくべきというご意見をいただきました。ここにつきましては、後に出てまいります長野県のポテンシャル、そういうものも生かしながら、人々の生活、ライフスタイルですか、そういったことをいかにとらえていくか、あるいは、いかに計画に盛り込んでいくか、そんな方向でとらえております。
　それから、人口減少、ダウンサイジングといったこと等から検討させていただいてきているんですけれども、それにつきまして、人口減少は社会や経済、そういった広範な範囲

に影響を及ぼすということではあるんですけれども、その影響の軸となる、あるいは、それをどう克服していくか、そういう軸となる社会システム、そういうものについては、とりわけ重要なものとして整理したらいかがか、というご意見をいただきました。これは力を注ぎたいところでもあります。

それから、右へまいりますが、「長野県のポテンシャル」という部分ですが、ここ変わっているところがございます。ここについていただいたご意見は、長野県がそもそも備えている、言うならば、大地から与えられた、ちょっと固い言い方になりますけれども、所与のものとしてのポテンシャル、備わっているものとしてのポテンシャルと、その上での人間の、人々の営みということになるんですが、長野県の先人の努力によって生み出されたもの、こういったものについて分けて考えてみたらいかがかと、こんなご意見をいただきました。

書き表し方も変わっております。分け方としましては、まず今、述べさせていただきました最初につきましては、いうならば１番目、天賦の恵～大地から与えられた特長～、こんなようなところ。「美しく豊かな自然環境」、それから「大都市圏への近さ・交通の結節点」、見ようによっては、長野県というのは海から遠いとかそういうことにもなりますが、いまやこういう高速交通時代、あるいは情報の行き交う時代にありましては、それがかえって中心部として重要な結節点になっているのではないかと、そういった観点でございます。

２番目のほうですが、営為の賜、ここが人々の努力というところを強調したい部分になります。これは（1）にありますように、「全国トップレベルの健康長寿」です。２番目「教育を大切にする風土と県民性」、これは長い年月をかけて長野県民が築いてきていること、また、今も大事にしていきたいことと考えております。３番目につきましては、「伝統を受け継ぐ地域」、地域特性、豊かに展開している長野県、これをイメージしております。「企業家精神を育む土壌」、これにつきましても、今までの歴史、活躍を踏まえております。それから長野県、大きいと言われるんですけれども、大きさの中にいろいろな地域的な特性がございます。これも強調したいところです。それで「際立つ地域の個性」というとらえ方をしながら、これを活用し、よりよい信州を築いていきたい、魅力をアップしていきたいという、そういう思いでおります。この部分が第１編に関するところです。

第２編になりますが、長期的な県づくりの方向ということになります。

最初に、「20年後の信州に向けて」となります。それで、ただいまのポテンシャルや、それから、これから述べさせていただく20年後の信州に向けて、同時に、本日初めて見ていただきますが、基本目標の中の四角で囲まれた部分にくくり出しで表現されておりますが、その後の20年後の目指す姿、黒ポツのテーマ、ここ入っておりませんけれども、こちらのほうと密接に結びついた展開という流れになっております。ぜひ連動させてご検討、ご意見をいただけたらという、そういう思いでおります。

それで、20年後の信州に向けてとなりますが、時代の潮流と課題、長野県のポテンシャル、それから目指す姿の関係、これを明瞭にできないものかというご意見をいただきました。その思いを、今、冒頭に述べさせていただいたことになります。どこ、そこがどのように結びついているか、ここ、にわかには申し上げられないところなんですけれども、説明の中でこれきっちりつながっていると思っておりますので、またご質問等いただきまし

たらお答えもさせていただこうと思っております。
　それで基本目標のところです。四角に囲った部分です。仮ではございます。大きな方向として、このようなことを考えております。「『信州』を磨く。」それから、「～確かな暮らしが営まれる美しい信州～」、どのような姿という形で表現していく、そういう方法もあるかと思います。今までのポテンシャルに関係したところにもあらわれていることなんですが、長野県のすばらしさ、これから長野県が歩んでいく道とするなら、でき上がったものだけじゃなくて、ある時点で完成ではなくて、それは途中の完成、すばらしいものができたとして、それから常にステップアップを図っていきましょうという、そういう願いを込めております。一つの行動の目標として、我々が住んでいる大事な信州というものを磨いていきましょうと、それで「『信州』を磨く。」となります。たどりつく目標とするならば、「確かな暮らしが営まれる」という、そういう美しい信州をつくり上げていきたいという、そういう思いでございます。このような基本目標というものを掲げております。では、それはいかに具体的に行くのかというところが「20年後のめざす姿」ということになります。
　ここでは、前回ですと、いうならば３つの項、そういう形で整理してまいってきております。前回では、そのうちの「居場所と出番」、そういったことはセーフティネットとしての意味合いが強いということになると、飲み込み切れない部分があったのではないかという、そんなようなご意見をいただいております。それ、やっぱり強調したい部分にもなりますので、くくり出しております。
　それから、長野県のポテンシャルとしてとらえてきた健康長寿、教育を重視すべき、そういった意見もいただいてきております。それで、右側のほうにくくり出しております。「世界一の健康長寿」、これをしっかり踏みしめ、また、これからも維持していきたいということになります。また「教育立県」ということ、これも大事にしていきたいことで、別立てでくくり出しております。
　それから、今までのようなことを踏まえながら検討してまいりましたが、その今の段の下のほうに、社会の仕組みでございます。これを掲げてきているんですけれども、では、それをどのように実現していくか、あるいは、その実現に当たってどのような社会というものの実現を目指したいのかというところが、この社会の仕組みというところに表されているものです。今までですと、エンジンというような言い方で言ってきていることなんですが、「信州独自の自治による自立度の高い地域」、あるいは「交流・連携を深めるネットワーク型社会」、それから「分厚い層が支える新しい公共」等、そういったことを今のところは考えております。また、ご意見をいただけたらと思います。
　大きなご指摘、それから今の、前回の会議からのいろいろな情勢等々を我々が意識しながら加えてきた検討というのは、以上のところになります。
　とりあえず、僕からの報告、ご説明はここで切らせていただきますが、いわば表題だけですので、この詳細については事務局のほうから、続けて説明をいただきたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

（岩嶋企画参事兼企画課長）
　上原専門委員にご説明いただきましたけれども、若干、掘り下げてといいますか、詳細にご説明をしたいと思っております。

現状認識、時代の潮流と課題、長野県のポテンシャル、これは上原専門委員のご説明のとおりでございます。第２編の長野県の県づくりの方向について、一部重複するかと思いますけれども、私のほうで説明をさせていただきたいと思っております。

今、説明がございましたように、この２編の中に、新たに「20年後の信州に向けて」という項を設けさせていただいております。これは、時代の潮流と課題だとか長野県のポテンシャル、これが将来の長野県の姿につながっていくであろうけれども、その流れが不明確であるということで、これのみですべてを表すわけにはいかないんですけれども、新たに記載をしております。

知事のあいさつにもございましたけれども、経済成長の果実でいろいろな課題を解決をしてきたという日本の歴史があるわけなんですが、それだけではもう解決ができない、いわば、これまでの延長線では解決ができない課題、これが多く存在する時代を迎えております。そんなときに、我々の心の底流、我々といいますか、日本人の心の底流の変化、価値観の変化ですけれども、それを考えましたときに長野県の優れた特性が輝きを増してくるのではないか、そんな可能性が大いにあるのではないかということでございます。この輝きを確かなものにしまして、すばらしい県をつくっていくために、この特長を県民全体で磨き上げていこうということで、基本目標につなげております。

次に、基本目標でございます。「『信州』を磨く。」という行動目標と、「確かな暮らしが営まれる美しい信州」という目指す姿、これを組み合わせてございます。

この４月に、県では、観光部に信州ブランド推進室を設けて県のブランド戦略を進めております。中期総合計画の基本目標や20年後の目指す姿というのは、そのブランド戦略と大いにかかわってまいります。このブランド戦略の進み方を見ながら最終的なものにしていくのが、よりよい目標だとか姿につながるということで、現在、仮のものとしております。ただ、方向性については大きく異なることはないとは考えております。

次に、20年後の目指す姿です。これも上原専門委員から説明がありましたように、テーマとしてだけありまして、キャッチフレーズがありません。今、申し上げたように、県のブランド戦略との関連で、とりあえずは置いておりません。今後、調整、整理の上、提案をさせていただきたいと思っております。

その「20年後のめざす姿」の項ですけれども、先ほど説明ありましたが、３つから５つに増えております。これ上原専門委員がおっしゃったとおりでございまして、世界一の健康長寿と教育立県、これ長野県のポテンシャルだとか、長野県の県民性を重視すべきという判断から独立をさせております。それぞれ５つの項について、説明をさせていただきます。

まず一番左側にあります「世界への貢献」です。人口減少や経済の成熟により国内需要があまり伸びないというような中で、長野県の活力を維持していくためには、世界との関係、これを重視する必要がある。この中で、企業家精神など発揮して活躍していくということが重要であるということで、その点を重視した項でございます。ごらんになっていただければわかりますように、「世界をリードする最先端産業」、「世界品質の農産物」、「世界に選ばれる信州の魅力」、それと「知の拠点」ということで、４つの目標を掲げてございます。

その右側、仮置きで「ゆとりのライフスタイル」としてございますけれども、価値観の

変化に対応しまして、自然など長野県の持つポテンシャルを生かして、ゆとりあるライフスタイルが味わえる長野県をつくろうというものでございます。「楽園信州」、「感動との出会い」、「自然のお裾分け」、「どこでもドアの信州」と、楽しいといいますか、なかなか我々はこういう表現を使わないんですけれども、一言で言いあらわせるような表題をここではつけてあります。

次に真ん中、「居場所と出番」です。これは、時代の潮流の人口減少やその変革を求められる社会資質と関連する項だと考えております。単にセーフティネットというだけではなくて、自己実現という視点も加味しております。目標は「100%の自己実現」、「子育て先進県」、「あんしん社会」ということでつけてございます。

その右側、「世界一の健康長寿」、ここをごらんになっていただきたいと思います。健康長寿につきましては、長野県の基本的な願い、長野県民の基本的な願いであると同時に、長野県の優れた特性とも言えます。これを将来にわたって維持しようというもので、長野県、日本一の長寿県でございますけれども、「世界一の健康づくり」を目指そう、「生きがいが生み出す元気な暮らし」、それと「世界に誇る保健活動・医療」という３つの目標を掲げております。

最後に、一番右側の「教育立県」ですけれども。これも長野県民が素朴に目指すものの一つであると思います。教育による人づくり、あるいは地域づくりであろうと思います。人口減少の時代を迎えるわけですけれども、個々の県民の能力を最大限に発揮することが長野県の活力にもつながりますし、個々人にとっても一生をより有意義なものにするという役割、これが教育にはあるわけです。「人間力を養う」、「行きたくなる学校」、「自然の中でたくましく」、「個性輝く」ということで、４つの目標を設けております。

その下をごらんになっていただきたいんですけれども、「社会の仕組み」というのがございます。今、申し上げた「20年後のめざす姿」を実現するためには、社会の仕組みを変えていく必要があるのではないかという考えから、この３点を挙げております。長野県、ご存じのとおり、地形的な制約の中で人口の少ない村が多いわけです。こういった状況で、長野県の中で、信州独自の自治によりまして自立度の高い地域づくりが必要である。それとペアになりますけれども、同時に大都市、あるいは国内外、あるいは災害のとき、最近クローズアップされたわけなんですが、いろいろなネットワークが必要であろうと。それともう一つ、分厚い層が支える新しい公共とありますけれども、県や市町村だけではなくて、例えば地縁組織、ＮＰＯ、企業、これが重層的に社会を支える新しい公共が必要であろうということで、３つの仕組みづくりをここに置いております。

その下に「県民共有目標」、「現状とのギャップと克服すべき課題」とございます。県民共有目標については、「20年後のめざす姿」、可能な限り具体的な数値などを検討してつくり上げるわけなんですが、現況とのギャップがございます。これが克服すべき課題であるわけなんですけれども、その下に、５年の取組とございます。これがギャップを克服して、将来の目指す姿に至る方策を示すというものかと考えております。

第３編の重点的に取り組むプロジェクト、これについては、次回の総合計画審議会でお示ししていきたいと考えております。それで第４編には、県づくりのための基本施策、今は例示で幾つか出ておりますけれども、これも次回以降、順次お示ししてまいりたいと考えております。第５編は各地域が目指す方向とその方策、いわゆる地域編です。先ほどの

「際立つ地域の個性」というポテンシャルがございましたけれども、やはり長野県の大きな特徴です。この地域づくりの方策をここでお示ししたい。第６編は、県として「計画を推進するための基本姿勢」をここにお示しするということにしたいと考えております。

このような構成で、中期総合計画を今後、策定していきたいと考えております。説明は以上でございます。

それとお手元に資料２、これを文章にしたもの、それと資料３、これまでいただいた意見、そのほか参考資料がございます。ご参考にしていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（山沢会長）

ただいまご説明ございました。今日のこの議題としましては、私の希望としましては、今、資料１でこの大綱の素案のイメージが載っているわけでございますけれども、「現状認識」、「ポテンシャル」、これの方向性としてはどうなのかというようなことで、それを受けて、第２編の「20年後の信州に向けて」という考え方が出てくるわけなんですが、それは、素案でいいますと13ページに文章として載っていまして、どうもこの「20年後の信州に向けて」というのは、どうも素案の文章のほうがよさそうです。それで、基本目標が出てくるというふうなところが一つ大きなポイントになるかなと。

それで２つ目のポイントとしては、その目標を実際に貫徹するために必要なテーマというのを５つほどここでは挙げていると。前回までは３つだったわけでございますけれども、世界的な健康長寿と教育に関すること、長野県が長い間で、先人の努力によって得た資質の一つかと、健康長寿ということと教育に熱心であると。これをさらに受け継いでいこうというこういうふうな形でできてきて、それをその目指す姿の実現のために、社会の仕組みづくりとしては、小さくなっていますけれども、これ実は素案の25ページに文章として載っているわけです。というところあたりまで、方向として皆さんの意見がいただければ大変うれしいというふうに考えております。

そういう意味で、最初からブツブツと切ってしまいますと連携がとれなくなりますので、まず全体の、今、ご説明をお聞きして皆さんが持ちましたご疑問等、ご意見等を全体を通して30分ぐらいお願いをして、その後、少し細かい話ができればいいかなというふうに思っています。

そういう観点で、今、２時でございますので、30分ぐらい、少し全体のイメージが変わりましたので、そのことについてご意見をお願いいたします。どうぞご自由にご発想をご発言ください。どうぞ。

（中山委員）

前回議論させていただいたといいますか、お話をさせていただきました若者の地域からの流出という件でございますけれども、私が木曽のほうの地域懇談会に参加をさせていただきまして、もう地域で本当に、伝統文化の継承も含めて、あるいは各種団体の存続も含めて、地域とすれば非常に若者の流出が激しい。したがって、もうやっていけない状態まで来ているというお話がございます。そして、この場でもお話をさせていただき、そういう中で、企業の創設とか、そういった方向で雇用の場をつくるということが大事だという

ようなご議論もいただいたかと思うんです。まさにこのテーマに、２編のテーマでございます「居場所と出番」というところであれば、お手元の資料にも今日出ていますけれども、いわゆる生産年齢人口が大きく長野県、減っていく中で、さらに県外流出ということになると、これは大きな問題が出てくると思います。若者の居場所と出番をどう確保してどう維持していくのかということで、私はその部分では、働く場、雇用の場というのも大事なんですが、そのテーマ性とすれば、若者が地域に根づくといいますか、根づいて地域に戻ってくるというような、そんな大きなテーマが一つ、必要なのではないかなというふうに思います。

確かな暮らしが営まれる、あるいは、先ほどお話ございました、その健康長寿、あるいはすべての項目に入ってくる、信州の発展を担う若者がどうやったら地域に定住していくのか。ご案内のとおり、県内の高校を卒業すると、そのうちの８割を超える方々が県外の大学へ進学する。そしてその後戻ってくるかというと、お戻りになってこないというのも相当ございます。したがって、Ｉターン・Ｕターンも含めて、今、盛んにものづくり信州として確保しようということをやられているわけでございます。

繰り返しになりますが、そのテーマ性としてどうかというのはよくわからないんですが、若者が根づく、そして出身地域に戻ってくる、そんな信州というのを大きな一つテーマとして掲げていく必要性があるのではないかということを強く感じたものですから、一言申し上げたいと思います。以上でございます。

（山沢会長）

ありがとうございます。ただいまのご意見は若者の居場所ですね、それと出番という、そういう場をきちんと、この居場所と出番のところに記述する、そういうことも可能ではないか、そのようなことが必要ではないかというご指摘です。ほかにございますか、どうぞ。ご遠慮なくどうぞ。少し分けたほうがやりやすいですか。

それでは、第１編の時代の潮流と課題という、現状認識のところございますけれども、この４つの現状認識。これは今まで議論してきたこととそんなに変わらないというふうに考えておりますけれども、この点について、ここだけは言っておこうというようなことがございましたら、ご遠慮なくどうぞご発言ください。

私、率直に申し上げて、人口減少もそうなんですけれども、少子高齢化が長野県は実はもう大きな問題というふうに考えていまして、今の中山委員のご発言と同じように、若者がもう大幅に減っていくという、そこが非常に大きいというふうに思うんですけれども、そこを明確に書く方法もあるかなと思っていて、そこはちょっと人口減少という、このスパイラルというのはそういうことも入っているのかなと思いますので、それを含んでいるということでよろしいかなと思うんですけれども。

いかがでございましょう。それでは、また戻ったりしますので、このポテンシャルはいかがですか。２つに大きく分けて、大地からの恵みと、それから先人の努力と大きく２つに分けた。この先人の努力という、こういう考え方というのは、このポテンシャルという、信州の特長ということでは、初めて言葉としてこういうふうに明確に出されたというふうに思うんですけれども。この辺はいかがでございましょう。これはあれですか、知事のお考えが随分大きいんですか。

（阿部知事）
　これ専門委員の皆さんにご議論いただいて、私もいろいろなところであいさつを最近させてもらうときに申し上げているのは、長野県は、実はほかの県と比べて教育県、今は教育県ではないと思っている県民が増えていますけれども、教育県であったり、健康長寿県とか、そういう人為的な行為を冠にかぶせて称される数少ない県だと思っています。しかも、ほかの県の人からそういう形で言われるので、そういう意味では実はそういう、何というか、自然の恵みではなくて、先人たちが築き上げてきたものを土台にこれからの長野県をつくっていくということは、私は重要な視点だというふうに考えています。

（山沢会長）
　どうぞ。

（母袋委員）
　母袋です。ポテンシャル、まさにここに書かれている内容そのものだと思うんですが、ほかにもいろいろあると思います。
　天賦の恵みの中の、大都市圏の近さとか交通の結節点という、この表現ももちろんこれでいいんですが、やはりロケーション的に、地理的に見ますと、まさに日本のど真ん中なんですよね。この日本のど真ん中からいかに、全国のみならず世界へ発信するかという表現が必要ではないかなと、こんな感じを持ちます。

（山沢会長）
　私も非常にそういうイメージがあるんですけれども、日本の本当に真ん中から、それも高い山地を持っているところから全国に向かってこうなんだと、それが世界に広がってこうなんだというふうなイメージだと、楽しいですね。確かに、もちろん大都市圏へ近いという、真ん中ですから近いんですけれども、これもそうなんでしょうけれども、何かそういうふうなものが必要、一つ、そういう言葉が入るとよろしいかなと思っています。
　やっぱりこれだけ、空気、水、太陽、景観ということで自然に恵まれているわけですから、これを守らなければいけないわけですが、それがやっぱり日本の真ん中からちゃんと守っていきますよという、実は、自分の大学の宣伝で申しわけないんですけれども、やっぱり温暖化が一番早く出てくるのはアルプスだというふうに言われていまして、実際にもう随分起きているわけですけれども。したがって、アルプスというのをきちんと観察して、アルプスの自然ですね、それを観察することによって非常に日本の温暖化の細かなことがかなり明確に出てくるという、逆にいうと、アルプスの温暖化をさせない、自然を守っていくというのが長野県の役目の一つになるのかなと、信州の役目の一つかなというふうにも思うところがございますので、ぜひ中心というのを一つ入れていただきたいと。
　ほかにございましたら、どうぞ。

（小松委員）
　ポテンシャルに関連してでございますけれども、自然から与えられたものと先人の努力

と、それから際立つ地域の個性というのが、３つが並列的に記載をされておりますけれども、見方を変えますと、（１）の自然環境と（２）の先人の努力の交差する点に地域の個性というのが出ているという見方といいますか、ここでの書き方はこれでいいかもしれませんけれども、やっぱり見せていくという観点からいくと、交差する点に個性があると。そのことが、この次の段階の、各地域が目指す方向をどうするのかという検討の大きな素材になるような気がしますので、ご検討いただければと思います。

（山沢会長）
大変いい意見でございますね。地域の個性、地域の話というのがこういうふうに明確に出てきたのは、多分、今回の素案の中で、それ今まで議論している中では十分ではなかったと思うんですね。今、ではその地域の個性はどこから出ているのか、どこへ向かうのかということを考えた場合には、今おっしゃったようなご発言の内容というのは非常に重要かと思うんですけれども。
専門委員の方で、ここの点、どうなんですか、議論の中で、そのようなことというのも、はい、どうぞ。

（上原専門委員）
重要なことであり、また難しい表現だろうなと思いますね。また、ねらい、内容としては望みたいところと思います。
このポテンシャル全体のところなんですが、この総合５か年計画全体のイメージにもつながることなんですけれども、これは僕の多分、個人的な思いという部分にとどまるかもしれませんけれども、この計画を、これからの長野県を描いていくんですけれども、困ってつくり上げる計画ではなくて、今までの、我々の自負やプライドやそういったものも誇りも含めて、ここからスタートしたいという、そういう気持ちなんです。そのスタートといってみても、空虚、空想ではなくて、今の１番目でいうならば、これだけすばらしい大地があるという、これはもう誇りにしていいと思いますね。それから、人間として築いてきた部分というこういうものを踏まえて、では、この新しい時代にどういう形の長野県をつくっていくかと、これを描きたいと思っています。
長野県、広い面積を占めているんですけれども、これも冒頭でも述べさせていただいたように、ただ広いだけではなくて、それぞれの個性があるという、それで人の営みと自然からの恵みの上でと、ありがたいご指摘だと思います。またよいお知恵をいただきたいと思います。ぜひお願いします。

（山沢会長）
ほかにございますか。はい、どうぞ。

（藤原委員）
この新たな５か年計画の構成イメージは大変すばらしい目標に向かっていると思います。私はもう理屈抜きで、明治時代の浅井洌の「信濃の国」のあの歌のような、ああいうふるさとができれば、もう完璧ではないかと思います。以上です。

（山沢会長）
かなりの人がそれなりに思っているのではないかと思うんですけれども。
ちょっと余計な仕事を言い出したなんて怒られるかもしれませんけれども、この大綱というのは、普通、絵はつかないんですか、もう文章だけで全部いくんですか。余計なことかな。最近の若い人は、絵なんかが入ったほうが、というのは、そうなりますと、ポテンシャルもどこがどうなっているかという絵がパッとこう出てきてわかりやすいかなと思ったり、いろいろ美しく豊かな、例えば９ページでこういろいろ書いてあるんですけれども、こんなもの、絵を見れば、絵なんかを見れば、一見でパッとわかってしまったりとか、そういう努力はなさらないんですか。

（原山企画部長）
ぜひ、そうしたいと思います。

（山沢会長）
ちょっと手間かかるんですけれども、大変ですけれども。ブランド推進室という超専門家を集めた課ができたそうですから、お仕事をあげたほうがいいかなと。
ほかはございますか、少し進めて現状認識とポテンシャルを受けて、20年後の信州に向けてということで、この基本目標が最終的には、ここの「20年後の信州に向けて」ということで基本目標が出てくるんですけれども。それから13ページをちょっとごらんください。ここで、文章を読めばこういうことを言いたいんだなというのがわかる。この資料１のポツが５つと、その後、四角が出てくるだとよくわからないんですけれども、文章ですと非常にわかりやすくなっている。ここまでのところでいかがでございましょうか、ご意見をお願いします。
この文章を読みますと、上の第１段落、第２段落では、日本の大震災の発生に起因して家族や社会のつながりを重視することが、今、非常に言われている。物質的な豊かさだけではなくて、質の向上やゆとりのある多様な暮らし、これが必要なんだというふうに言われていて、こんな時代には、まず１番目に、信州の豊かな自然や美しい景観に囲まれるゆとりのある暮らしというのがありますと、これはずっとやってきたことだと。そして、ゆとりの結果として健康長寿で、そしてそれを支える経済力として、独自の技術を持った競争力のある産業がありますということで、かなり昔から、そういう意味では、信州というのは、このような少し厳しい状況の中できちんと生きてきた、サスティナブルに生きてきたという、そういう実績があるんだと。もちろんいろいろ問題もあるわけでございますけれども、そういう良さをさらに磨きをかける時代が来たのではないかという、そういうことで、多分、「信州を磨く」という言葉が出てきたと、私、一生懸命勉強してこういうことかなと思ったんです。その辺の議論をちょっとお願いします。

（野原委員）
いつも、この20年後というのに引っかかって申し上げるんですけれども、例えば世の中、20年後がどうなるかというようなことをきちんと示す必要があるような気がいたします。

また、問題は、若者が現在、非常に夢を失ってしまっている。いわゆる経済も停滞している上に、国の財政も大変で、加えて企業も日本から海外へどんどん出て行ってしまう状態で、グローバル化の中で東南アジアを中心に海外のほうが優勢になってきている。自分たちが居場所をどこに求めたらいいかという、さっきの中山さんのお話のように、なかなか若者が夢を、いわゆる胸を張って将来を語ったりできるような状態では無いのが現状だと思います。

ですから、20年後にはどういう時代が来るだろう、例えば世界の人口は70億人になろうとしている。だけど日本の人口はどんどん減っていく。長野県も20年後には30万人くらいは減ってくるというような中で、必ず食糧問題というのは出てきます。ですから、20年後の食糧の事情はどうなるかと。では、そういう、いわゆるポテンシャルのある長野県の中で、その部分はもう自給ができるくらいのいわゆる農業生産王国をそこで築くんだとか、それで他県との格差をつけるんだとか、何かそういう夢を語る必要があると感じます。将来の20年後に想像されるであろう社会に対して、どういうふうに長野県がそれに挑戦し、力強い長野県を示す必要があるように感じます。当然、農業の従事者も出てくるだろうし、産業においても20年後というのは、かなりの進歩がなされると思うんです。医療にしてもそうだし、農業にしてもそうでしょうし、観光にしてもそうでしょうし、特に産業の場合には先端技術をいかに育成するか。自然の中の空気のきれいなところで研究者が集まれるような、そういう先端の研究が集まるような長野県をつくり上げるんだとか。何かもうちょっと夢のあるようなものを掲げないと、ただ、きれいな言葉で並べているだけだと、何の感動も得られないままにいわゆる計画ができ上がるという、何かそんなような気がしております。

もうちょっとその辺のところを、具体的に夢を語っていくことの必要性を感じます。これらの夢を更に膨らませ、絞り込んでやっていくことによって、若者たちが見て、ああこれは、なかなか長野県の今後の総合計画としては、今までとは違うというようなことが出てくるのではないかというふうに考えておりますので、その辺を更にご検討いただければというふうに思っております。

（山沢会長）

どうぞ。

（諸富委員）

私は、これ事前に読ませていただいて、前回と比較ということになりますと、相当興味深いものにしていただいたというふうに考えています。ほぼ、ここに書かれてある内容、私自身も賛同するところが非常に大きく、いい方向で書いていただいたのではないかというふうに思っております。その中で少しこの論点を、何らかの形で補完させていただく観点から、ちょっと意見を申し上げたいんです。

長野県のポテンシャルの点では、何がいいかということを認識しないことには、それをさらにどうしていくかということを議論できないので、ポテンシャルのところでしっかり長野のいい点がつかまれていると思います。この仮とされていますが、「『信州』を磨く。」というタイトルも非常に腑に落ちるものでして、まさに信州の良さを掘り下げていく、さ

らに掘り下げて、それに投資していくということですよね。長野のいいものにさらに投資をして良くしていき、狭い意味での、工業的な意味での競争力だけではなくて、いろいろな意味での長野のポテンシャルを掘り下げることによって、長野の広い意味での競争力を高めるということだと思うんです。そこがうまく「20年後の信州に向けて」のところは表現されているような気がいたします。

ただ、現状の満足に終わるのではなくて、長野がいいものを持っているものをさらに投資するには、広く長野以外の地域、あるいは世界から最先端のものを常に学んで学習をして、さらに自己革新を経て自らを発展させていく長野であってほしいなと思うんです。そういう意味では、他から学ぶ謙虚な姿勢も必要だと思いますし、例えば観光一つをとっても、日本アルプスがあるからというだけでは客は来てくれないわけでして、ヨーロッパを見てもそうですけれども、実は自然といっても、ほったらかしになっているわけではなくて、自然景観を保持するために非常な人手をかけているわけです。景観というものに対するはっきりしたイメージがあって、それを守っていくために非常に多くの人手をかけて、コストもかけています。

それからサービス業、旅館・ホテルにしましても、非常に高品質なサービスを提供するためには絶えざるやはり自己革新と、サービスとは何かということに関する、極めてクリエイティビティの高い仕事だと私は思いますので、待っていたら客が来るという姿勢では当然だめなわけでして、そういうことで、いいものが存在している、物質的な意味で存在しているんですが、それを価値に変えていくためには、基本的にはやはり人の能力であり、人のネットワークであり、その人とネットワークが常に学習をして、自分たちをよくしていく努力を、絶えざる革新を行っていくというものが、長野の社会の中に組み込まれていくということが必要だと思うんですね。

そういう意味で、知識社会にこれから入っていくんだと、単純な工業社会から知識社会に入っていくんだというキーワードをよく言われますし、そういう意味では、教育がここで強調されるというのはすばらしいと思います。同時に、地域社会で集合的に学習していくというコレクティブ・ラーニング（collective learning）という言葉が、よく教育の世界では言われるんですけれども。私がパッと思うのは、長野はそういう意味では、すごくいい伝統を持っていまして、私なんかは飯田に通っていますので、飯田が自治公民館制度という制度を作っていて、自治会と公民館による社会教育を結合させたような地域自治の仕組みであり、なおかつ、地域の人はそこで学んでいって地区の方向を考えていくような仕組みを持っております。これなどは、他の日本のほかの地域に輸出すべきすばらしいソフトだと思うんですが、そういうところから、ああいう飯田のような革新的な政策が打ち出されてくるボトムアップ型の仕組みの秘密があるのではないかと思うんです。

それから、長野県は教育県だと、知事もおっしゃいましたけれども、ここではちょっと学校教育に力点が置かれ過ぎているような印象がありましたが、実はそれだけではなくて、社会人になってからも常に学習を続ける、革新を経ていくような仕組みを作っておく必要がございまして、これからの社会は、おそらく創造性、クリエイティビティというものが非常に重要になっていく社会になっていくと思いますので、創造性というのは、天才のピカソの頭の中だけで出てくるわけではなくて、どんなレベルでも創造性は発揮し得ると思うんです。大なり小なり人は創造性を持っていますし、ただ、それは、人の頭の中で出て

くるのではなくて、いろいろな人とかかわり合う中でも出てくるものだと思いますので、そういうものを生み出していく仕組みを組み込んでいくという、ちょっと抽象的にお話をさせていただきましたが、そういうあたりをもう少し入れていっていただければというふうに考えました。基本的には、大変賛成でございます。

（山沢会長）
ありがとうございます。ほかにご意見、どうぞ。

（母袋委員）
母袋です。今もお話ありましたテーマを、当初３つという設定の中で５つにしたということですが、どうしてそうしたのかということをお答えいただければと思います。
結論的には、私も大変幅を持ったテーマが設定されたのかなと思います。キーワードとか文字的にこれまでもよく言われる内容と、それから今回、この新しく視点として取り入れられたものと両方マッチングしているので、幅広さを感じました。
そういう中で、「『信州』を磨く。」というのは、いってみれば、原点はやっぱり県民一人一人だと思うんですね。その県民一人一人が、まさにこの現状認識から始まって、計画をきちんと受けとめて自らを変えるとか、自らがやっぱり主役なんだという意識を持たせるとか、投げかけるということが、私は何よりも重要だと思います。
そういう意味で、自立という言葉もあちこちに出ておりますが、やはり県民一人一人が自立するんだということとあわせて、一方で、絆とか協調性を持たせる社会をつくる。それにどう貢献するか、その意識を持ってもらうことが大変重要ではないか。そういう意識がないと、なかなか変わろうとしても変われないという現実があるから、申し上げさせていただきます。それから、連携・交流というのは非常に大切な視点で、まさにボーダレスとか、よりダイナミックな物事を進める上にあっては、この意識こそ本当に大切なことだと思います。
それから最後に、「世界の貢献」という言葉が出ました。この言葉は長野県だからこそ発信できるようなものなのかなと感じております。なかなか日本全国、世界にどう貢献するかとか、どんなことができるかとかというのは悩ましいこともあるんですが、今までは日本一の県とか、日本一の都市ということは言えても、世界という言葉を使えるという都市はそうはないし、というような気はします。したがって、この世界にどう貢献するかというのは非常に大切な視点だと思いますので、この分野においては、大変、目新しさの意識として私は持ったところでございます。

（山沢会長）
ありがとうございます。ほかはございますか。金先生、どうぞ。

（金委員）
こんにちは、金です。よろしくお願いします。全体、すごくすっきりまとまってテーマ性も見えてきたなと思っております。
３つ、言わせてください。１つ目、20年後ということで、高齢化は明らかで、80何歳ま

で住んでいる。昔は、高校ぐらいまでは行く、義務教育はまだ小中学校どまりですけれども、今現在は大学進学率が短大まで入れて８割ですね、大方の人が22歳なり、修士課程まで行けば24歳。それから、どこまで働くのかというときに、今、定年60歳に設定されていますけれども、いずれこれ延ばさざるを得ないと思うんですよね。長野県のように元気な、もう70歳なんてまだまだお元気な方がたくさんいらっしゃいまして、高齢者というと何か介護というのは、ちょっとこの発想はやめたほうがよくて、長く生きてきた人にはそれだけの知恵とか、いろいろな経験がありますので、こういう高齢者がどんどんと活躍すべきと思います。

したがいまして、「居場所と出番」のところで、冒頭、すべての県民がという書き方がありますけれども、もっともっとその高齢者が働いて社会貢献する。だから高齢化時代でダウンサイジングで何かしょぼしょぼとしていくという発想はやめて、一般に上に行くほど下を圧迫するようなことがイメージがあるんですけれども、ちょっと発想を変えたほうがいい。

先陣切って、例えば県庁なんかもそこらの仕組みを。ただし、それをやるためには、従来の年功序列のような給与システムとか、それではちょっとやっぱりやっていけないので、40、50歳で賃金はとまって、そのかわり子育てとかそういうところでのサポート体制に、賃金体系とかも、雇用体系とかも、変えていかざるを得ないんじゃないか。これは、ここにどこまで盛り込むかは別にして、ちょっとそういう意識を持った形での高齢化というのを、この「居場所と出番」に入れてほしいというのが１つ目。

２つ目の、同じくそこの「子育て先進県」、安心して子どもを産み育てられは、趣旨は全く賛成なんですけれども、拝見したときに、やっぱりこれ、男女共同参画とか女性とかという言葉がちょっとないので、ここの安心して子どもを生み育てるの主語は何なんだというときに、できればこれは家庭と社会という２つのファクターで。家庭というのも家族の形態が、随分、いいか悪いかは別にして、変わっておりますし、子どもを育てるときに家庭、家族の役割と、それから社会でサポートしていく、そういう視点と同時に、それをするためには女性が働いて、社会の中で女性も意欲を持って居場所と出番を、何ていいますか、活躍する、そういうものがほしいなと思いました。

最後は、とても小さなことで申しわけないんですが、教育立県の一番最後の「個性輝く」のところで、障害により支援をというのは、これは大賛成なんですが、できればこれ「障害等」とするか、あるいは「障害により」をなくす。いろいろな子どもも多様化し、外国籍の子どももいますし、子ども自体、大人の支援を必要とする存在ではありますけれども、教育の現場で支援を要する子どもということを考えたときの、ちょっとそんな視点がほしいかなと思いました。よろしくお願いいたします。以上です。

（山沢会長）

ありがとうございます。３つほど、お話の中で重要な指摘がありました。真ん中の「居場所と出番」の「子育て先進県」のところで、やはりもうちょっと、男女共同参画等の中で使います普通の言葉が全然こう出てこないんですけれども、その辺、言葉遣いとしては、今、金先生がおっしゃったようなことを含めた意味になるようなことがいっぱいございますので、その辺、少しうまい表現の方法を考えていただきたいし、基本的にも社会、それ

から家庭と、両方で子どもを育てるんだという、そういう考え方を明確に出していただきたいということでございます。
　それから教育のところで、「個性輝く」の、障害だけではなくて支援を必要とする子どもたちもこれから増えてくるわけでございますので、その点の配慮も必要であろうというふうなご指摘でございます。
　ほかにございますか。どうぞ。

（中山委員）
　「20年後のめざす姿」に、先ほど野原委員さんもおっしゃっていただいたように、私も、いわゆるリードする、長野県をこういった県にするんだ、日本の中で、世界の中でこういった県にするんだというような、そんな大きな目標があっていいんだろうなと。
　例えば日本のシリコンバレーにするんだと、開発の拠点が長野県なんだと、そういう一つのテーマ性。あるいは農業でも、今日、藤原村長もお見えですけれども、全国でも30数%、日本一のレタス、あるいはブルーベリーもクルミもプルーンも、加工トマトも、アルストロメリアもカーネーションも、これは全国に誇るものでございますので、そういったものを中心として、農産物は、世界の中でも日本の中でも、長野県はもうトップを行くんだという、そんな大きな目標を持っていけるような、そんなことを掲げる、20年後にはそういうことがあっていいんだというぐらいにリードするような、そんな目標を持ちながら掲げていただく。この中身自体は全然それで、お書きいただいているのは全く問題ないんですが、信州を磨いて確かな暮らしができるんだけど、具体的に何をもってして確かな暮らしが営まれるのかという、その担保するものが、目標とするものが、我々、これから20年後に、ああそういう形の長野県をしていきたいんだ、するんだ、ではそれに対してみんながどうしていくんだというような、そんなリードをしていただけるような、そんな目標があるとありがたいと思います。

（山沢会長）
　必要ですね。専門委員の方、大変でしょうけれども、何か出てきませんか、その辺。ちょうど20年と言いますと、今の温暖化の進行状況だと、お米も豆も全部北海道までは行かないんではないかなと思うんです。ブドウでしたら長野県の山間地で大丈夫かなというようなところがあって、20年ならまだ信州の農業も日本の中でメインでいられるのではないか。それ以上、温暖化が進むとちょっと全部北海道だという話もありますので、そういうことはないようにしたいというふうに思うんです。
　多分、県づくりのための基本施策、４編のあたりと、その３編のプロジェクトのあたりで、実際にエネルギーとか食糧の自給とか、そういう話がパッとこう出てくるんでしょうけど、その辺を先取りした形で、20年後はこうだというのが少し出てくるといいんですけど、その辺、ぜひ専門委員の間で一度ご議論をいただきたいというふうに思います。
　ほかはございますでしょうか。どうぞ。

（小口委員）
　医療関係者として、テーマの一つに「世界一の健康長寿」を入れていただいたのはあり

がたく思います。
本県が長寿県である理由に関しては、正確な分析はできていないと思いますが、健診体制の普及・充実、保健師の役割の大きさなどが挙げられていますが、自然環境の良さも大きく影響しているものと思われます。
国では、2025年に向けて、医療・介護の提供体制をシミュレーションし、すでに動き出しています。そこには、高齢化がますます進む中で、一つは都会を主として、高齢者単身世帯の増加が著しく増えていること。もう一つは2030年までに約40万人の死亡者の増加が見込まれ、看取りの場所の確保が困難になっていることなどが想定されています。これらは、いずれも大きな社会問題になりかねません。
そういう見通しの中で、世界トップレベルの健康長寿先進県を目指すわけですが、高齢者の受け皿作り、安心して老後を迎えることのできる仕組み作りを、計画の中にしっかりと打ち出していくべきではないかと思います。そうすることによって、老後に対する安心感が生まれ、さらに若者も安心できる基盤が生まれるのではと思います。
それから、このような将来の医療・介護提供体制を考えていく場合に、関係者だけで考えて構築しようとするのではなく、これからは地域住民の方々と医療介護関係者とが、一体となった体制作りをしていく必要があると思います。そうすることで、住民の方々も主体的に健康長寿化活動に参加でき、また、そうすることで医療介護提供体制にも理解・協力が生まれるものと思います。
うまく言えなくてすみませんが、以上です。

（山沢会長）
おっしゃりたいのはよくわかります。やっぱり世界一というか、今のところ日本一の健康長寿県なんでしょうけれども。当然、その先には、先生が今おっしゃられたような、社会の体制が健康長寿を支えるという中に、健康長寿で終わる、人生を終わる人に対する対応を社会システムの中にきちっと組み込んでいかないと、それは多分、信州モデルとして出てくれば、それは日本全体に行き渡るという、そういうお考えなのかなというふうに思っているんですけれども。
これはぜひ、私もちょうどそのころでございますので、入れておいていただけるとありがたいです。どうぞ。

（青山委員）
青山でございます。私は今は東京に住んでおりますが、いつかは長野県に住みたいなと、そんな県になってほしいなと思いながらこの場に参画をしているわけです。現状分析も、それからポテンシャルも、20年後のめざす姿も大変よく分析されていますし、一般の人たちが読んでもわかりやすい工夫や、まさにキャッチなコピーも含めて、よく工夫されているなというふうに拝見をいたしました。
ただ、先ほどどなたかもご指摘をされたと思うんですけれども、熟年とか高齢者と、あと子どもが何かベースになっていて、若者や、もっと生き生きと元気に働きたいとか、暮らしたいという人たちに向けてのメッセージが、少し何か弱いのではないかなというふうに承りました。よく読めば、「世界をリードする」とか、それから「100％の自己実現」と

いうことですので、もう非常に前向きな中身になっているんですけれども。何となく「居場所と出番」と言われると、やっぱり高齢者かなとか、若者の居場所と言われても、何となくちょっとマイナス的なニュアンスにとらえてしまう。すみません、素人的な印象なので大変申しわけないんですが。そうではない中身が書かれているわけですので、何かもう少し、これは何か新たな自分の可能性が発見できるのかなとか、何かそういうニュアンスを少し加えていただいたらいいのではないかなというふうに思います。

あと、最近ちょっと東京で報道されていたんですけれども、新規採用の若者たちの意識調査というのをしたところ、周りと競争したいとか、それから自分で何かにチャレンジをしたいという気持ちがなくて、周りに合わせて何かをやっていきましょうというような若者がもう極めて多く、企業の皆さんたちからは、もうそういう人材は求めていない、どうやったら競争心を持って新たなものにチャレンジしていく人材を育てていくかというようなことを取り上げていたんです。この本当に閉塞感のある、現状維持とか、どう守るかとか、何かそういう時代の中にあって、やっぱりある種、協調性というのはすごく大事なんですけれども、そこをどういうふうにこう打破していくかというような人材というのは求められているんじゃないかなというふうに思っているんですね。それがこの長野県のポテンシャルの中にある「起業家精神を育む土壌」というところにうまく分析されていると思うんです。何かやっぱりこれからの時代もやっぱりそういったものをうまく、これも磨いていくのになるのかもしれないんですけれども、そういうことをやっぱり磨いた人材を生かしていくということも必要なのではないかなというふうに感じました。

それともう一つ、ちょっと社会の仕組みのところでもいいでしょうか。社会の仕組みの中で、「信州独自の自治による自立度の高い地域」というのは、まさにそのとおりで、これから広域連合とか、それから基礎自治体の皆様方の自立性の高い社会の仕組みで、どういう社会が興ってくるのか、20年後というのは読み取れないんですけれども、ここの部分をちょっと拝見していくと、それでは、県はどういう役割を果たされていくのかなというのがちょっと見えない感じがするんですね。逆にどういう形になっているのか読めない中で、県はこれをしていきますのが言いにくいのかもしれませんけれども、そういうその自立、基礎自治体などが、これ自立をしていく中での県の役割というのがもう少し明確に出されていてもいいのかなというふうに感じました。以上です。

（山沢会長）

ありがとうございます。素案の25ページのところですね。自立度の高い地域という、１であるわけですけれども、この中で県の役割というのがなかなかわかりにくくなっている。このめざす姿の実現のための社会の仕組みづくりと、３つ挙げているんですけれども、これはこんなものですか。今日は少し時間があって議論が進めそうなんですけれど。今、青山委員のお話にございました自立度の高い地域づくり。それから２つ目は、ネットワーク型の社会というのをつくっていくんだと、社会の仕組みとして。３つ目が、分厚い層が支える新しい公共ということで、行政ニーズの多様化、複雑化に対応するような、そういうシステムをきちっとつくっていく。県民一人一人、ＮＰＯ、それから民間企業、そういう方式が混在した形で、それぞれの公的なサービスを役割分担できちっとこなしていくという、そういうことを書いているんですけれども、その３つぐらいですか。

私が言うまでもないんですけれども、５つのテーマによっていろいろ、ここに書いてある３つの社会の仕組みの重要度が、あるいは担い度が変わってくるのは間違いないんですけれども、この辺ですかね。はい、どうぞ。

（諸富委員）

私自身は、これだけに尽きないのかもしれないですけれども、基本的方向として社会の仕組みで、３つに書いてあること、非常に重要で、必要十分ではないかもしれませんが、基本的にこうなのかなと。長野も各地域が、地理的にもある程度、分散、自立型であって、まだこれからの社会でもエネルギーが、まさに現在言われているように、集中型で重厚型なものから分散型のエネルギーシステムに変わっていくというふうに言われていますように、社会が強じんになっていくため、トップダウン型、集権型ではなくて、地域である程度自分たちのことを考えて、自分たちで投資をして地域を良くしていくと。自分たちでできないものは、近隣の市町村、地域で協力し合う、水平的なネットワークをつくっていくと。そういう中に、いわゆる公共部門だけじゃなくて、ＮＰＯや地元の企業が加わっていくという方向だと思うんですね。そういうものが重層で折り重なっていく中で長野が形成されてくると、より強じんな社会になっていくということだと思うんですね。ですので、長野県として全体の絵を描いて、トップダウンで何か自ら事業を直営していく場合もあるのかもしれませんが、基本的に足腰の強い社会をつくろうと思った場合は、人に投資をすることと、それから基礎自治体を中心としてその地域社会を強くしていくことをバックアップしていくということが非常に重要ではないかと。

私が専門としているところで言えば、長野県では温暖化対策課のほうで再生可能エネルギーの地域協議会を、今、順次立ち上げられていらっしゃいますけれども、まさにああいうイメージでしょうか。全県を10ぐらいの地域に分けた中で、各地域でいろいろなステークホルダーの方が入って、分散型エネルギーシステムを下からボトムアップ型でつくっていく。ただ、個々が孤立していてはできないので、協力し合う仕組みを県がそれを場として提供していく。それから県庁にはいろいろな専門的知識を持ったエキスパートの官僚の方々が、やはり市町村よりは非常に豊富にあるのではないかと。そういう知識や技術的知識を利用して、基礎自治体をバックアップしていくということは十分できると思うんです。ですので、そういう県の役割、新しい形で再定義をされるとよいのではないかなと。基本的なキーワードは既にここに書かれているというふうに思います。

（山沢会長）

ありがとうございます。ほかにございますか。どうぞ。

（小松委員）

今の仕組みのところで３項目ありまして、３番目の「分厚い層が支える新しい公共」という部分。表現でありますけれども、新しい公共という表現の持つ意味、あるいは定義というのが、私、個人的にはちょっと懐疑的でありまして、あえて言うならば、共益の社会というふうに理解をするべきかなんて思っているんですけれども、この辺の定義をどうするかという点について、とらえ方によって違ったのではいけないのかなというような思い

をしておりましたので、検討していただきたいということであります。
　それから先ほどのキャッチコピーの、もう一つ、よろしいでしょうか。

（山沢会長）
　どうぞ。

（小松委員）
　青山委員さんから、若者へのメッセージが見えないというお話がございました。また、中山委員さん、野原委員さんからも関連のご発言がございました。この「『信州』を磨く。」については、ターゲットは県民一人一人という市長さんのお話もあったところでございますけれども、そういう意味では、13ページの第１章の「20年後の信州に向けて」というこの前文のところで、20年後でありますから、もう既に次世代の皆さん方にバトンタッチされている時代でありますので、20年後の担い手の皆さん方に明確なメッセージが発信されなければいけないというのが一つあると思います。それからもう一つは、やっぱり元気な高齢者の皆さん方へメッセージもあるということですから、前文の中でその辺のところを、目標を持ちながら５か年はどうなんだというちょっと書き込みをしていただくことがよいのではないか。さりとて、基本目標の仮称のこのメッセージを、だれから見てもすべて自分のこととしてとらえられるには、なかなか限界感もあるかと思いますので、前文の中でそこのところは明確にやっぱり、項目的にターゲットを定めて書き込んでメッセージを発信していくというようなことがほしいかなというふうに思います。

（山沢会長）
　樋口先生、どうぞ。

（樋口委員）
　全体としていろいろご苦労されて、よくまとめられたと思うんですが、ちょっと非常に細かいことになるかもしれませんが、産業のところを通して読んでみると、社会を支える仕組みのところまで考える、野原委員からもちょっとお話がありましたが、ちょっと具体的なイメージに欠けるところがあるような気がします。現状、非常に「成熟した経済」で厳しい状況にあるという現状の認識があって、ポテンシャルとしては「起業家精神を育む土壌」があるんですが、20年後の姿が、世界をリードするということ、言葉自体は構いませんが、企業の方に限らず、将来、長野県で仕事をしようという方々が読んだ場合に、世界レベルの知恵や技術が集うとか、世界をリードするというのは本当なのかという疑問もあろうかと思います。具体的にターゲットを明示して挙げたほうが、産業の場合にはわかりやすいのではないか。
　例えば、長野の中小企業の20年後の姿を考えた場合には、アジアの企業、あるいはアジアの人々との交流というのは非常に重要な要素に、今でもそうですが、さらに重要な要素になるということがあるのではないだろうかとか、野原委員のお話にありましたように、研究環境ですね。これからは人を中心に物事が動いていくわけですから、研究環境をきちっと用意していくということで、世界レベルの知恵や技術が集うことになるとかですね。

そういうところが、いずれこれ、多分、取り組むべきプロジェクトの中で姿は見えてくるとは思うんです。世界をリードしたいのは長野県だけではなくて、47都道府県、皆さん同じことを考えていると思います。そういう中で、長野県がなぜ世界をリードできるのか、最先端の産業が起きてくるのか、なぜ知の拠点になり得るのかというところについて、多少、ヒントとなるキーワードを、ぜひ20年後の姿のところに、具体的にお書きになるときに入れていただいたほうが、ああそうかと、長野にはこういうメリットがあるのかと。そのときに実はポテンシャルがとても大事で、ポテンシャルでお書きになっているこれまでの先人の努力、これまでの蓄積から、こういう形で長野が産業面では世界をリードすることになるんだという一つのシナリオが読み取れるようにしていただけると、より迫力が増すのではないかなと。ちょっと極めて、それはもう産業振興は産業振興でビジョンがあるじゃないかというようなお話になろうかと思いますけれども、実際に答申をお書きになるときには、ちょっとその辺のところを細かく書かれたほうがより説得力が高まるのではないかなというふうに思います。ちょっと感想ですけれども。

（山沢会長）
ありがとうございます。どうぞ。

（松岡委員）
教育学部の松岡です。あまり教育の話がちょっと出ないもので、私、教育学部におりますので。小・中・高の教員養成、大体は小・中が主になりますけれども、先生になる学生さんを教えています。私、長野に来て30年ぐらい経つんですけれども、私が赴任したときは、教員を志望して、県外で教員になりたいという人もそれなりにいたんです。ところが今の学生さん、ものすごく変わっているんです。ちょっと驚くかもしれませんけれども、長野に就職したいんです。東京とかほかの首都圏とかからいろいろ大学推薦が、今、来るんですよね。ところが学生に言いましても、あまりそれに応募しない。やっぱり長野で先生になりたいという、そのすごい強い意思を持っている学生が増えている、どうしてかなというふうに思うんですけれども。

それは非常に歓迎すべきことで、長野でぜひ教員になりたい。でも、教員ってなかなか最近受かりませんし、就職しても大変なところというのはすごくあるんですね。まずは教師の仕事が忙し過ぎるんじゃないかというところ。人を育てる人が大事ですよね。子どもをよく育てましょうというのをみんなだれもが望みとして思うんですけれども、その子どもを育てる先生が疲弊していたら、いい子は育たないんですよ。やっぱり先生が活力あって生き生きしていて元気で子どもに向かっていける、そういう教師を教育学部ではつくっていこうというふうに思っているんです。そうやって一生懸命頑張って、長野に就職したいといって長野県の先生に、例えば３年とかかけてなっていくんです。実際に教員になると、思うようにできない部分、非常に先生の仕事が雑多で、教えるということ以外の仕事のほうがいっぱいあるということなんですね。その辺をもうちょっと変えていくことというのがあまり出てこなかったので申し上げているんですけれども、非常に大事じゃないかなと。

さらには教師だけでできないんですよ、やっぱり教育というのは。教師といっても一人

の人間ですから、さまざまな能力を備えるといっても限界があります。そうなると、やっぱり地域で子どもをどうやって育てていくかという視点というのが、私は非常に大事じゃないか。やっぱり人を、人材を育成するということが、県にとっては最も大事なことじゃないですか。幾ら物が豊富であっても、それを生かしきれないような人間ばっかりではしようがない。さらには長野にいたい、長野で教えたいというその先生たちが、就職してからきちんと学校でその能力を発揮できるような環境をどうやってつくっていくのかということ。もうそのあたりがあまり書き込まれていない、こちらの文章のほうを見ても書き込まれていないもので、ちょっと気になっているところでございます。それは１点。

あとは「20年後のめざす姿」ということなんですけれども、私、最初のころ、20年後がわかるんですかと質問したんですが、具体的な姿は非常にやっぱり難しいと思うんですよね。でもおおよそ、ですから、先ほど樋口先生が、本当にずっと20年後世界をリードするような産業なのかと言われると、それはわからない。不確かな部分もあるかなというふうに思うんです。でも、そうかといってめざす方向がないのは問題かなと思いますので、あまり具体的にというとちょっと難しかろうなという、ある程度の方向性、姿で示すしかないんだろうなということは考えています。

その場合に、めざすというときに、今あるものを維持していくという、そういうめざすというのと、今ないもの、マイナスな部分を補っていくことのめざすというのと、二通りあるかなと思うんです。それによってどういう力の入れようか、戦略も違ってくるかなと考えたりしています。ですから、今を維持してさらに伸ばしていくということと、欠点を補ってめざすというものとを、ちょっと書き分けみたいなものがあるともっとわかりやすいかなというふうに思います。

そして「『信州』を磨く。」というときに、県民一人一人が自分でスキルアップするか、何か磨かれるということなんだと思いますけれども、「『信州』を磨く。」と県民の方が見た場合に、自分を磨くとはちょっと思わないかなと思ってしまうんです。何かもっと自分も磨かれるというような部分が出ればなおいいかなと。信州を磨いてくれるのは行政かな、私なんかに磨けっこないわという、そう思う人もいないではないと思いますので、その辺もう一工夫、では何か出せと言われてもちょっと出ないんですけれども、何か一工夫ほしいところかなと感じております。以上です。

（山沢会長）

ありがとうございます。ほかにございますか。どうぞ。

（岩嶋企画参事兼企画課長）

先ほど母袋委員から３つの頂がなぜ５つになったかというお話がございました。簡単に説明を当初させていただきましたけれども、確かにここ、突然、３つが５つになったというイメージがおありになるかと思います。我々の検討の過程をお話をしたいと思います。

まず「居場所と出番」というところで、人間のところに視点を当ててそこですべての事柄を受けておりましたが、人間ってあまりにも異質でして、いろいろな場面があります。ここの、現在の「居場所と出番」の頂ですけれども、これはセーフティネット、裏返せば自己実現が必ずできるということかと思いまして、可能な限りそこに集約できるように、

それでも子育てが入ったり、「あんしん社会」ということで非常に範囲が広いんですけれども、それだけに絞ってあります。ここに以前は、健康長寿であったり、一人一人の人間力を磨く教育、ここまで入っておりました。これについて非常に違和感があるというのが、実は庁内から大きく声が出ておりました。ただ、それでも３つの頂の中におさまるものかなと思っておりましたが、どんどん声が大きくなってまいりまして、この２つを独立させたというのがあります。

それともう一つ、ポテンシャルについて、教育についての議論がありました。現況は非常に難しいところはあるんですが、長野県の江戸時代の識字率が高かったということから、長野県民って教育にものすごく思い入れがあるんだから、それを重視しない手はないんじゃないか。そうしますと、そのポテンシャルに対応するテーマがあれば説明が非常に楽になります、というようなことから教育を出した。

同時に、世界一の健康長寿とありますけれども、健康長寿も長野県の非常に誇るべきもの。もちろんいろいろな課題はあるんですけれども、誇るべきものであって、世界一を20年続けるというのは大変な努力が要るわけでして、目標といいますか、頂の一つとしてめざすものとしても十分耐え得るものではないかというような議論がございまして、この２つを新たに頂として追加したという経緯がございます。よろしいでしょうか。

（山沢会長）

ほかにございますか。どうぞ。

（阿部知事）

では、ちょっと。私も出させていただいたので少し、皆さんのお話を伺って触発されたところも含めて、少し意見を申し上げたいと思います。

まず第２編、「20年後のめざす姿」、野原委員からお話がありましたけれども、ここは世界全体なり社会の動向の中で、やっぱり長野県はどういう位置を占めるのか、どういう位置をめざすのかと、やっぱりしっかり記述をしていかなければいけないのかなというふうに思います。そういう意味で、時代の潮流のところが、これ日本レベルで議論して、長期的な県づくりの方向は世界の話になっているので、少し、第１編のところもより広い視点で記述しておく必要があるのかなというふうにも思いますし、「20年後のめざす姿」も、これは世界の中で長野県が占める位置をどういう位置づけにするのかということを考える上で、やはり世界の動向についても視点に置いていかなければいけないなというのは、ご指摘のとおりだなというふうに思いますので、ちょっとそこはよく検討はしなければいけないだろうと思います。

それから、「20年後のめざす姿」のところの、ややインパクトが弱い感じがあるんじゃないかというお話がありましたけれども、私も少しここのところの記述の仕方が若干、定性的な記述にとどまっているという状況なので、これでいいのかどうか。その次に「県民共有目標」と「現状とのギャップと克服すべき課題」というところが、今回は空欄になっているんですけれども、ここのところで数値的なところは集中的に書くのがいいのか、目標、めざす姿のところにもう少し定量的な部分も入れ込むのがいいのかというのは、ちょっと要検討課題かなというふうには思います。

それからこの計画全体は、母袋委員からもお話ありましたように、私としては、これ県の計画ではあるけれども、県民の皆さんと一緒に実現する、これは市町村の皆さんももちろんそうでありますけれども、広く県民に投げかけていくべきものというふうに思っております。そういう意味で、これ目標、めざす姿のところよりは、もう少しプロジェクトベース、あるいは克服すべき課題のところで、記載の仕方については、県として責任を持って取り組むこととそれ以外のものについては、書き分けていく必要があるのかなというふうに思います。

それから基本目標の記述のところですけれども、これは、私もぜひ、ここはもう少し哲学をしっかり出していく必要があるのかな、出していったほうがいいのかなと。例えば、今も記述はされているわけですけれども、私として考えているキーワードとしては、例えば社会的な公正さの問題であるとか、あるいはここにも一部記載ありますけれども、持続可能性。持続可能性は環境の問題に限らず、財政、経済の持続可能性という観点もあると思います。それから自治体という、長野県自体が自治体でありますけれども、分権、自治、自立というようなキーワードとか、これ社会の仕組みのところに書いてありますけれども、交流、あるいは共生、さらに人が中心、松岡委員からもお話ありましたけれども、やっぱり人間を中心に位置づけていくというようなこととか、さらに諸富先生がお話になりました自己革新とか世界に学ぶとかですね。今、委員の皆様方からお話を伺った中でもかなりいろいろな、長野県として大事にするべき価値観のキーワードがいろいろ出てきているんじゃないかと思いますので、そういう部分をやはりこの基本目標の記述のところにはしっかりと位置づけていくということが必要だと思います。精査をしながら位置づけて、そうした価値観をやはり県民の皆さんと共有していくというプロセスが、この計画が棚に飾られるだけの計画になるか、ならないかの瀬戸際じゃないかなというふうに思いますので、そこは、今後専門委員の皆さんとも一緒になって検討をしていく必要があるだろうというふうに思います。

それからもう一つ、先ほど景観についてのお話もございましたけれども、実は、私の問題意識として、時代の大きな転換点にある中で県政が行うべきことというのは、これまである意味で当然のように国が何とか法をつくって規定をしてきた、もちろん自治事務もいっぱいあるわけですけれども、しかしながら、多く都道府県の行っている事務は、国が制度・仕組みの枠組みをつくっても、その中で発想して、その中で事業を行っているという部分が多かったわけですし、今の時点でも多いわけです。けれども、やっぱりこれから、我々、分権自治というものを強化していったときには、やはりより自主的・主体的な業務を増やしていかなければいけないと思いますし、自主的・主体的な業務を増やすということは、単に国と違ったことをやるということだけではなくて、県民が本当に必要としている行政ニーズは何かというのを見極めて取り組んでいくということだと思っています。

その一つが例えば景観、これ、景観行政はもちろん景観法もありますけれども、やはり今回の予算の中でも、農村景観についての研究会をつくってしっかり取り組んでいこうというふうに思っていますけれども、今までとウエイトづけ、業務のウエイトづけをかなり、私は変えていかなければ、県民のニーズには対応してないし、なおかつ次の時代に向けての長野県を築く上で、今までと同じ資源配分、人もお金もそうですけれども、そういう配分では、きれいな言葉を並べても実際の業務は変わらないということになってしまいかね

ないと思っています。
　そうしたこの中期計画は、私にとって、知事にとっての中期計画というのは行政の守備範囲をどう変えるかと、どこに重点を置くかということで、私自身は考えております。そういう意味で、よりめり張りをきかせてこの計画をつくりたいと思いますし、ぜひ委員の皆様方においても、今まで行政、こういう分野が弱かったけれども、やはりこれからの時代をつくるには、こうしたところに優先的に資源配分する必要があるんじゃないかと、そういう観点でのご意見をどんどんいただければありがたいなというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

（山沢会長）
　ありがとうございます。知事の決意表明も出たところで、ちょっと短い時間でございましたけれども、大体時間がまいりましたので本日の議論はここまでとしたいと思います。
　なお、資料３、ちょっと見てください。意見募集に対する審議会の考え方でございますけれども、本日の議論を踏まえまして、必要な修正を加えた上でホームページに公表したいと思います。ご賛同いただきたいというふうに思いますけれども、よろしゅうございますでしょうか。ありがとうございます。
　今、ただいま知事からのお話もございましたけれども、新たな総合５か年計画というのは、これは県民に共感を得て、県民一人一人と県が組織的、またおのおの、そういう意味では一人一人が取り組む問題だということでございます。そうなりますと、県民の皆さんの意見というのをお聞きするということはもちろん非常に重要になってくるわけでございます。資料の１、２について、今、ご議論いただきました大きな流れと、それから素案ですね。これも審議会としてパブリックコメントをいただくことというふうに考えておりますので、よろしゅうございますか。ありがとうございます。
　本日、ただいま、１時間半ぐらいかけていろいろ議論いただきましたので、その議論を踏まえました修正を加えた上で、県民の皆さんの意見をいただくというように、事務局はよろしくお願いいたします。
　次回の審議会では、ただいまいただきましたご意見を踏まえまして、専門委員の皆さんに引き続き検討をお願いして、審議会に案としてお示ししていただきたいというふうに思います。専門委員の皆さん、お忙しいでしょうけれども、ひとつよろしくご検討のほどをお願い申し上げます。
　最後に、次回の審議会の日程を事務局からご説明ください。お願いします。

（中坪企画幹）
　それでは、事務局から次回の開催日程についてご説明いたします。お手元に新たな総合５か年計画の策定についてという資料、１枚の資料でございますが、差し上げておりますのでご覧いただきたいと思います。
　この資料の４の策定日程にございますとおり、次回審議会は６月13日を予定しております。詳細につきましては、後日ご連絡を申し上げたいと思いますので、よろしくお願いいたします。事務局からは以上です。

（山沢会長）

次回は６月13日でございます。お忙しいとは存じますけれども、佳境でございますので、よろしくご参加のほどをお願い申し上げます。

それでは、本日の審議会はこれで閉じさせていただきます。ありがとうございます。